



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネートが重要になっています。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネートのポイントを連載で紹介します。

NPO法人 日本ボランティアコーディネーター協会
事務局長

ことり 麻理子 さん

2005年4月から、日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)事務局として、市民参加を支えるボランティアコーディネーターのネットワークづくりをめざし、人材養成や調査研究、啓発活動を進めている。

東京都社協 東京ボランティアセンター勤務時には、市民からのボランティア相談や地区ボランティア活動・企業の社会貢献活動などを推進。東京都北区ボランティアセンター出向時には、地域福祉活動計画策定にも参加。

第11回 活動できなくなったボランティアたちへの気配りを

あきらめムードもチラホラ

大都市圏を中心に緊急事態宣言が継続するなか、「不要不急の外出は控えよう」という呼びかけのもと、巣ごもり生活はもうしばらく続きそうです。とりわけ重症化リスクの高い高齢者層にとっては命にかかわる事態です。感染者数が少ない地域でも周りの目を気にして以前のようには動きにくい状況もあるのではないのでしょうか。

相変わらず再開の見込みが立たない活動も少なくなく、とりわけボラセンに登録している方(団体)には高齢の方が多い傾向があるため、慎重にならざるを得ない実情があります。自粛のモードに入ってそろそろ1年、我慢の日々から再開をあきらめるムードになってきている活動はありませんか。

社会参加の機会を失ったことでの影響はないか

ボランティア活動を続けている人たちに継続している理由を問うと、よく聞かれるのが「楽しいから」という言葉。社会や地域のため、誰かのためになるという利他的な動機と対になっているのだと思いますが、ボランティアは活動者本人にとってもさまざまなメリットをもたらしていたものと考えられます。その活動ができなくなった…。それ以外の外出や楽しみも制限され、ボランティアの皆さんは日常生活の変化にうまく順応できているのでしょうか。

いくつかの社会調査では、「運動」「栄養」とともに「社会参加」が健康寿命の長さに影響を与えること、社会参加活動が認知症の発症に対して予防効果を示したことなどが報告されています。感染が拡大して以降、「フレイル」という言葉をよく耳にするようになりました。感染を恐れて家に閉じこもりがちになることで、運動不足になったり、栄養が偏ったり、人とのコミュニケーションが減少したりと、体力や筋力の低下、さらには認知機能の衰えを訴える方々も増

えています。活動を失った高齢ボランティアに対して気を配るという視点、感染リスクのもう一方で生活が不活発になることで健康が蝕まれるリスクがあるという問題意識もコーディネーターとしては重要です。



再開できた事例に学ぶ、情報を発信しよう

絶対に安全、安心という保証がない以上、感染リスクを抑えながら、できそうなことから始めていくしかありません。元の状態に戻そうと考えず、こういうやり方ならばできるのではないかということ、すでに動き出している活動の工夫に学ぶことが近道です。

例えば、ある健康体操のグループは屋内での活動を小グループでの屋外ウォーキングに切り替えました。また、参加を控えているメンバーはメッセージをポスティングしながら街を歩いています。抵抗の強いオンラインを普及するために体験会を何度も実施し、企業や若者の力を借りてマンツーマンで学んでもらい、その後も継続して練習の場を設けサポートを行っているNPOもあります。送り先(福祉施設や病院など)を決めたうえで、ニーズに合った品物や手づくり小物などを呼びかけて橋渡しをしているボラセンもあります。病院内での活動ができなくなった代わりに馴染みの医療関係者にお弁当を届ける活動をしている団体も見られます。

こうした全国の創意工夫は「未来の豊かなつながりのための全国アクション」や、厚生労働省が発信している「感染防止に配慮したつながり支援等の事

例集」、感染者の多い東京では「ボラ市民ウェブ」に掲載されている参考事例集などで把握することができます。各地のボラセンや推進機関からもYouTubeチャンネルなどを使って元気なボランティアグループの活動動画が配信されるなど、インターネットを使ってたくさん事例が紹介されています。コーディネーターはこうした情報を幅広く収集し、ポイントを読み解いて、ボランティアのみなさんに届けてください。

とはいえ、情報提供だけではちょっと弱く、今もって動き出せないグループや活動者には、もっと身近なところで具体的に背中を押されるような場やきっかけが必要です。

そろそろリアルな情報交換と交流の機会をつくる

大がかりな交流会やイベントはまだ無理でも、小さな情報交換会や集まりは少しずつ始まっています。マスクは外せなくても、近況を伝え合ったり、話を聴いてそうそうと頷き合ったりするだけでも、少しずつ動き出してみようという気持ちの変化が起こるようです。声をかけたり、誘ったり、これまでだったら何でもないようなことがとても大切になっているのではないのでしょうか。

こんな状況だからこそ「ひとりぼっちにしない」関係性を、ちょっとした参加の場や役割を担い合う機会をつくることで維持していくことが必要な気がします。

もうじき4月。新しい年度が始まりますし、人々を取り巻く環境が変化する時期でもあります。感染予防の方策も日常生活のなかでずいぶん普及・定着してきましたので、止まってしまった時計の針を動かすにはいいチャンス。人と人とがゆるやかにつながれる機会をあなた流にしかけてみませんか。